2019年 2月 17日

中原キリスト教会

「哀歌：黙って待つのは良い」

聖書箇所：哀歌 3:22-39

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

哀歌というとどのようなイメージを持っているでしょうか。私は、エレミアがエルサレ

ム陥落を悲しんで歌った歌で、嘆きばかりで希望がなく、こっちも暗くなっちゃうので、 あまり読みたくない文書だ、と思ってきました。このような感想はかなり当たっています。しかし、よく見ると、単に嘆きには終わっていません。「希望」も示されています。 しかし、

詩編における「嘆きの詩」のように、嘆きからスタートして「希望」にて終わる、 という

形式ではありません。希望もかいま見られるけれども、その「希望」も続かず、結局、嘆きと悲しみで終わってしまう、という意味でやはり「哀歌」“哀しみの詩（うた）”と言わざるを得ないでしょう。預言書にも、最後まで“お先真っ陪”で終わる文書がありますが、 哀歌も基本的にはそのような文書です。

／

哀歌はヘブル語聖書では「エーカーJ

と言います。「エーハー」

とも言われます。

力とハ

の中間的な音です。

これは哀歌の一番最初の言葉が「エーカー」 という 「ああ！」

という

嘆き叫ぶときの感嘆詞を文書のタイトルにしています。創世記もヘブル語聖書では「ベラ

ーシート」 と言いますが、これも創世記に最初の「初めに」 という言葉が聖書のタイトル

になったものです。

ギリシャ語訳では「トレニ」、

ラテン語では「ラメンタティオネス］、

英語では Lamen ta tion と言いますがこれらは哀歌、葬送歌、悲歌、悲しい歌、という意味です。逆に哀歌という意味のヘプル語は「キーナー」と言いますがその複数形「キーノー ト」 と言いますと、 ヘプル語聖書では哀歌のことを指します。 もう一点、 哀歌について申 し上げておくことがあります。日本語訳はエレミア書のすぐ後にこの哀歌がありますが、 ヘブル語聖書では後ろの方にある諸書·諸々の書のひとつとして、伝道者の書のあとにあ

‘ "

ります。ヘブル語聖書が BClc にギリシャ語に翻訳された時、前書きがつけられました。「イ

スラエルの捕囚と、 エルサレム崩壊後、エレミヤは泣きながら座し、エルサレムについて

哀歌を歌った」 というものです。これ以降、哀歌はエレミヤ書と連続したものとされ作者

もエレミアとされました。エレミヤ害にはエレミアが書いたと推測される表現はありませんし、エレミヤ書との比較研究においてもエレミヤの著作ではない、とする説が有力です。 しかし、エレミヤの名を使ってエレミヤの弟子達が書いた、と仮定すれば、それはエレミヤが書いたもの、という前提でこの文書を読むのは信仰書としての聖書を読む態度として

問題はありません。 ダニエル書もダニエルが書いた、というのは疑間視されていますが、

これを読む時に、バビロニア捕囚の地にあったダニエルが書いた、という前提で読むこと

は間題ありません。従って、我々は、哀歌をバビロニアによるユダ王国の滅亡のあと、 工

レミヤによって読まれた詩である、との前提でこれをよむことに致します。

ー

ヽ・．

# また、哀歌は別々の詩が別々の時期に書かれたものを誰かが一つにしたのだという説が あります。・それは、1 章、2 章、4 章が一つの詩であり、5 章が後に追加され、3 章が更にのちに追加された、という説です。これを編集史的釈義と称します。聖書の文書を歴史的 に編集されてきたものとして解釈する方法です。そうかもしれません。哀歌の各章を一言 で表している注解がありますが、それによると、1 章＝哀歌、2 章＝絶望、3 章＝希望、4 章＝絶望、5 章＝期待とされていますが、編集史的理解では、第一段階は、哀歌、絶望、絶望になります。そして期待が付加され、更に希望が付加された、ということになります。

あまりにも暗い詩なので、期待が付け足され、更に希望の部分が付け足された、というこ とになります。この前提では、最初の「期待」も「希望」もない、詩を理解することが最 も原典に忠実な解釈である、となり、「期待」の章や「希望」の章が軽視される傾向がでてきます。これに対し、聖書はその背後の編集史はさておいて完成した文書が一時（いっと き）に一人の人によって書かれた、ということを前提に解釈・理解すべきだ、という考え があります。私は、信仰の書として聖書を読む時は、この後者の考え方、一時（いっとき） に一人の人によって書かれた文書として読むべきもの、と考えて居ます。従って、今、私 たちは、哀歌が、哀歌、絶望、希望、絶望、期待、と言う順序でエレミヤによって歌われ た前提でよむことになります。このことエレミヤが絶望と希望の間を揺れ動きながらこの

ノ

詩を書いた、ということになります。また、3 章の中を細かく見ると、「希望」一色ではなく、疑問に悩む姿、「希望」が実現しないのではないか、という揺れ、はては「絶望だ」という叫びなどが記されています。3 章のなかでも「希望」と「絶望」の揺れがあるのです。

5 章は期待を嘆願する章と言われていますが、絶望的表現、疑問の叫び等も織りなされており、やはり「希望」と「絶望」の揺れのなかで詩が読まれている、と言えます。このよう に見ると、哀歌は、「絶望」と「希望」の揺れの中で、苦悶の姿と共に読まれた嘆きの詩である、と言えるでしょう。実のことを言えば、このような揺れのなかで祈る、というのが 信仰者の実態であり、確固たる信仰に立ち、なんの迷いもない、というのは信仰者の実態 を反映していないのではないか、‘と思います。また「絶望」の中でのみ生きていくのは人 間は不可能です。「希望」の光の全くない闇の中だけでは人間は生きていくことはできません。‘‘何の希望もない”などと悟ったことを言う人も居ますが、本当に絶望の中を生きているのかと言えば、実はそうでもなく、毎朝、日が上るのが楽しみ、とか何かあるものです。 哀歌においても 3 章「希望」、5 章「期待」がなく、哀歌、絶望、絶望のみの詩であったとすればこれは人間の読んだ詩ではありません。神の恵みの光が全く入らない黄泉の国の底 の表現だと言わなければなりません。エレミヤはそ．こにあっても希望の期待の光を見出している、いや、それでも、かすかな光を望んでいる、と言えるでしょつ。黄泉に下られた イエス様もそうだった、のだと思います。

この哀歌という詩は、大変技巧的に創られています。翻訳では解らないのですが、ヘプル語聖書では各節がヘブル語のアルファベット順に並んでいるのです。日本語のいろは歌 のようなものです。「色は匂えど散りぬるを」という詩です。ヘブル語哀1 章歌の各節の

2

ヽぃ

最初の単語を読むと、エーカー バーコー、ガルタ 、ダルケー、と続きます。これらの単語の最初の文字は、ヘブル語のアルファベット、アーレフ、ベート、ギンメル、ダーレットです。2 章の各節の最初の言葉は、エーカー、ビラー、ガーダー、ダーラフですが、これらの単語の最初の文字はやはり、アー レフ、ベート、ギンメル、ダーレッ トです。3 章の場合は 3 節づつが区切りになっており、1 節から 3 節までは最初の単語の先頭の文字がすべてアーレフです。4 節から 3 つの節の最初の単語の先頭 文字はベー トです。最初の 3 節の最初の単語を読みますと、アニー、オーティー、アフであり、先頭文字はすべてアーレフで す。4 章も一節ごとにアーレフ、ベート、ギンメル、ダー レット、とつながって、アルファベットの最後のタウとなっています。5 章はこのような規則的配置になっ ていませんが、ヘブル語アルファベット 22 文字と同じ節の数になっています。但し、アルファ ベットではア ィン、ペツァーデ、ですがこのーか所だけは逆転してペツァーデ、アインとなっ ています。どうしてこうなったかにつきいろんな説がありますが定かではありません 。なおこのようなアルファベットの詩（うた）のように構成された詩をアクロスティック詩と言い、聖書 では詩編 119 篇が同様の例です。新改訳聖 書 1026p です。こちらの場合は 8 節づつが一塊です。1:1-8 の各節の最初の語の先頭文字はすべてアー レフです。アシュレー、アシュレー、アフ、アター、アハラー、アーズ オードゥハー エ トゥてす。9 節から 16 節はベートです。日本語訳で 1·8 は「幸いなことよ。全き道を行く人々、 主のみおしえによって歩む人々。2 幸いなことよ。 主のさとしを守り、 心を尽くして主を尋ね求める人々 。 3 まことに、彼らは不正を行わず、 主の道を歩む。 4 あなたは堅く守るべき戒めを仰せつけられた。 5 どうか、私の道を堅くしてください。 あなたのおきてを守るように。 6 そうすれば、私はあなたのすべての仰せを見ても 聡じることがないでしょう。7 あなたの義のさばきを学ぶとき、 私は直ぐな心であなたに感謝します。8 私は、あなたのおきてを守ります。 どうか私を、見捨てないでください」という信仰告白の詩（うた）です。これ以外では蔵言 31:10 以降がアーレフ、ベート、ギンメル、ダーレッ トというアルファベットの順 に単語が使用されています。とにもかくにも、哀歌はこのような技巧的な方法によっ て創られている、という事だけ心にとめておいていただきたい、と思います 。おそらく、これをヘプル語で朗誦するとリズミカルに聞こえるのでしょう。

／

ユダヤ人には各種のお祭りがあります 。三大祭と言われているのは過越しの祭り、七週

の祭り、仮庵の祭りです。我々クリスチャンにとっては受難週、ペンテコステ、感謝祭の 時期に対応します。ユダヤ人には 、これら以外にもお祭りがあります。そのなかで、ユダヤ暦 5 月 9 日は神殿崩壊日という日です 。これは B05 86 年にエルサレム神殿がバビロニアによって破壊されたことを思い起こす日です 。．同時に、ユダヤ人の悲劇的な歴史を記憶にとどめる日でもあります。この時に読まれる聖書がこの哀歌です 。まず、ローマ支配下におけるユダヤ人反乱の敗北があります。 AD70 年の第一次ユダヤ戦争における、第二神殿の崩壊、AD117 年のキトスの反乱、AD135 年の第二次ユダヤ戦争と続きます。この第二次ユダヤ戦争において放浪の民ユダヤ人は決定的になります。さらに悲劇はつづきます。

3

AD1275 年のイギリスにおけるユダヤ人追放、AD1492 年、コロンプス がアメリカ大陸を発見したとされている年のスペインによるユダヤ人追放、そして極めつけは 1944 年におけるナチスによるユダヤ人絶滅作戦です。このようなユダヤ人の悲劇の歴史を思いやるのが神 殿崩壊日です。そしてそこで、この哀歌が歌われるのです 。どうして、選ばれた民、イス ラエルがこれほどまでの悲劇的歴史を負わなければならないのでしょうか。そこにはイエ ス様の御生涯とオーバーラップするなにかが潜んでいる、と感じざるをえません。

この悲劇を歌う中で希望のかすかな光が見られる、というのが哀歌です。しかし、その希望の光はまた消え、絶望の底に再び落ち、せめての期待に希望をつなぐ叫びとも祈りともつかない、言葉を持って終わる、というのが哀歌です。その希望の光の部分が本日の聖書箇所です。本日の聖書箇所に入る前に、 1章、2章の哀歌、絶望の章から数か所見てみます。まず1:1 -2です。「ああ、人の群がっていたこの町は、ひとり寂しくすわっている。 国々の中で大いなる者であったのに、 やもめのようになった。 諸州のうちの女王は、 苦役に服した。／彼女は泣きながら夜を過ごし、 涙は頬を伝っている。 彼女の愛する者は、だれ も慰めてくれない。 その友もみな彼女を裏切り、 彼女の敵となってしまった」とありま す。廃虚と化したエルサレムの町のことを哀 悼の言葉でのぺています。町はヘプル語では 女性名詞ですから、女性の哀しみによって表現しています。次は16-1 7です。「このことで、私は泣いている。 私の目、この目から涙があふれるc 私を元気づけて慰めてくれる者が、私から遠ざかったからだ。 敵に打ち負かされて、 私の子らは荒れすさんでいる。／シオン が手を差し出しても、 これを慰める者はない。 主は仇に命じて、 四方からヤコプを攻めさせた。 エルサレムは彼らの間で、 汚らわしいものとなった」とあります。シオンとは エルサレムの神殿があった場所のことですが神殿そのものをさして言われます 。主は我々を見離し、神殿に居た信仰者もけがわらしい者となってしまっ た、と言っています。1章は

「嘆き」であり「哀悼の詩」であり、悲痛な叫びです。 2章はどうでしょう。2·3をお読みいたします。「主は、 ヤコブのすべての住まいを、容赦なく滅ぼし、 ユダの娘の要塞を、憤って打ちこわし、 王国とその首長たちを、地に打ちつけて汚された。／燃える怒りをもっ て、 イスラエルのすべての角を折り、 敵の前で、右の手を引き戻し、 あたりを焼き尽く す燃える火で、 ヤコプを焼かれた」とあります。主の怒りによって我々は完全に打ち砕かれた、と言っています。イスラエルは焼き尽くされました。ホロコーストです。ll · l 2を見てください。「私の目は涙でつぶれ、 私のはらわたは煮え返り、 私の肝は、私の民の娘の傷を見て、 地に注ぎ出された。 幼子や乳飲み子が都の広場で衰え果てている。／彼らは母親に、 穀物とぶどう酒はどこにあるのか、と言い続け、 町の広場で傷つけられて衰え果てた者のように、 母のふところで息も絶えようとしている」と言われています。「はらわたは煮え返り」というのは日本語のように怒る、という意味ではなく、私の内臓が引き裂 かれる、ということです。子供の悲劇的状態はいつの世でも人を惨愉たる気持ちにさせま すが、エルサレムの子供たちが衰え果て母のふところで死ぬ間際である、と言われていま す。まさに悲劇、悲嘆、惨憎 、惨劇です 。3章に入っても、この状態は変わりません。1·3

4

”

、．

# 節をお読みします。「私は主の激しい怒りのむちを受けて悩みに会った者。／主は私を連れ去って、光のないやみを歩ませ、！御手をもって一日中、くり返して私を攻めた」とありま す。19·20 節をお読みします。「私の悩みとさすらいの思い出は、 苦よもぎと苦味だけ。／ 私のたましいは、ただこれを思い出しては沈む」とあります。もうたまりません。何とかしてください。さもなくば永遠の眠りに入れてください、と言いたくなります。21節でや っと転換点が訪れます。「私はこれを思い返す。 それゆえ、私は待ち望む」とあります。「思い返す」という言葉はヘブル語では「シューブ（立ち帰る）」と言う言葉が使われています。 この言葉は新約では「悔い改める」とされることもある言葉です。「待ち望む」と訳さ れているのは「ヤーハル」と言う動詞で「待っ」という意味です。その変化形からして受 身的に「待っ」ということです。立ちすくんで待っ、と訳すこともできます。なにか希望を持って待っ、という意味合いはまだここにはありません。別な訳をしますと「私はこれ

を悔いる。ただ、待っ」となります。暗い状態ですが転換点の兆しは出てきています。

ヽ

# そしてやっと「希望」の光がさしてきます。22·24をお読みします。「私たちが滅びうせ

なかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだIそ。れは朝ごとに新しい。

- ＇

「あなたの真実は力強い。／主こそ、私の受ける分です」と私のたましいは言う。 それゆえ、私は主を待ち望む」と記されています。これだけ苦難の状況に置かれても「滅ぼし失せなかった」と言っています。ここでは、ユダ王国の滅亡に際し、イスラエルは滅び去ることはなかった、と言っています。先程のユダヤ人の歴史を現代にいたるまで、振り返っ て見ると、ユダヤ民族が死滅しなかったことは驚異としか言いようがありません。あのナチスによるホロコーストも生き延びたのです。これが「主の恵みによるものだ」と言って います。「憐み」、「慈しみ」等とも訳されるヘプル語の「ヘセド」で。「す主こそ、私の受 ける分です」とあります。「受ける分」というのは譲り受けるもの、ということで、イスラ エルが神より頂いた土地、嗣業といいますが、そこで使われる言葉です。受け継ぐ土地は 無いけれど、「主なる神」こそ自分たちが受け継ぐ土地、即ち私たちが住むところだ、と言

ゞ つています。離散の民とはなったが、主なる神を住まい、とする、と言っているのです。

このあとの「待ち望む」は先ほどと同じ「ヤーハル」で受身的に待っ、ことです。

25·29をお読みします。「主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。

／主の救いを黙って待つのは長い。／人が、若い時に、くびきを負うのは良い。そ・れを負わ されたなら、 ひとり黙ってすわっているがよい。／口をちりにつけよ。 もしや希望があるかもしれない」とあります。25節の「待ち望む者」は先ほどの「待っ（ヤーハル）」とは異なる動詞で「カーワー」という言葉です。これは何かを求めつつ待っ、意味です。いわば 積極的な待っ、です。消極的な「待っ」から積極的「待っ」へと転換している、と言えま す。しかし、26節の「待っ」はまた「ヤーハル」です。消極的「待っ」に戻っています。 じっと待っしかない、というのがいや希望があるかもしれない、希望を持って待とう、となって、いややはり希望は持たずにただじっと待とう、と揺れているので2す8節。をみると「黙って座っている」です。消極的な待ちです2。9節になりますと「もしや希望がある

5

`

かもしれない」となっています。希望というのは「ティクワー」という言葉で、イスラエルの国歌のタイトルになっている言菓で、“神に希望を置く”という意味です。日本語の単 なる願望ではなく、確実に実現する望み、のことです。神の約束であるから確実に実現す る望みなのです。しかし、新改訳では「もしや＿―-かもしれない」となっておりあやふやな 希望のようにも読めますが、この部分を直訳しますと 「おそらく、希望が存在である」となります。この「おそらく」は英語では「 ma y be」と訳されています。これは“…あれ” というように、望みの叫び、とも訳せる言葉です。そうすると、「もしや希望があるかもしれない」と訳されている部分は「ああ、希望がここに実現するように」と意訳することが できます。当然、積極的な「待ち」です。哀歌は全体としても、嘆きの詩の合間に希望の 光がかいま、現れる、というものですが 、この 21-29の中でも消極的「待ち」と積極的「待ち」が揺れている、と見ることができます。われわれが希望を持とうとしてもなかなか希 望の確信をもてな い現実を良く表しています。

30節は通り過ごすことのできない、 言葉です。「自分を打つ者に頬を与え、十分そしりを受けよ」とあります。口語訳では「おのれを撃つ者にほおを向け、満ち足りるまでに、 はずかしめを受けよ」と訳されています。新共同訳では「打つ者に頬を向けよ／十分に懲ら しめを味 わえ」となっています。フランシスコ会訳では「自分を打つ者には頬を差し出し、十分に辱しめを受けよ」となっ ています。クリスチャンはすぐイエス様の山上の説教の一節を主出すでしょう。マタイ5: 39です。「しかし、わたしはあなたがたに言います 。悪い者に手向かってはいけ ません。あなたの右の頬を打つような者には 、左の頬も向けなさいl と言われています。哀歌のこの箇所は、その趣旨を敷術しますと「あなたが打たれている のは、主のあなたへの懲らしめです。従って、あなたが誰かに打たれたならば、その懲ら しめを十分に受けなさい」ということです 。そのまま山上の説教に引き直しますと、“あなたの右の頬を打つ者はこれがあなたへの、主の懲らしめと考え、左の頬も出し、この懲 らしめ、訓練を十分うけなさい。手向かうことなどしてはならない。主のあなたへの訓練 ですから”という意味になります。 「試みる神」 「訓練される神」という創世記以降旧約聖書にめんめんと流れるイスラエルの信仰の見地からの解釈です。ニ紅）山上の説教の箇所

I

ー

。いずれにせよ、この哀歌の言葉がイエス様のこの言葉の背後にあることは確かだと思われます。 31節では「主は、いつまでも見放してはおられない」と言われ、希望をつなぎます。このようなアップ＆ダウンが 39節まで続き、40節で「私たちの道を尋ね調べて、 主のみもとに立ち返ろう」といわれ、やっと、本当に悔い改めて主に立ち返るかな、と思うと、 42節で「私たちはそむいて逆らいました。 あなたは私たちを赦してくださいませんでした」と記され、希望が消えゆくように感じられます c このあとは、主なる神への「なんとかしてください」という懇願や敵への仕打ちの願い等が述べられます。

4章に入りますと、また1章、2章の嘆き、悲しみ、絶望に戻ったかのようです。最後の節 だけお読みします。 「シオンの娘。あなたの刑罰は果たされた 。 主はもう、あなたを捕ら

6

7

# え移さない。 エドムの娘。主はあなたの咎を罰する。 主はあなたの不義をあばく」とな っています。もう捉え移すことはしない、と言われつつも、 「主はあなたの不義をあばく」と言われています。、；章に入ると、主への最後の懇願となります。懇願しつつも苦難の状 況に対する嘆きの言葉が消えることはありません。最後の19- 22節をお読みします。「しかし、主よ。 あなたはとこしえに御座に着き、 あなたの御座は代々に続きます。／なぜ、いつまでも、 私たちを忘れておられるのですか。 私たちを長い間、捨てられるのですか。／ 主よ。あなたのみもとに帰らせてください。 私たちは帰りたいのです。 私たちの日を昔のように新しくしてください。／それとも、 あなたはほんとうに、私たちを退けられるの ですか。 きわみまで私たちを怒られるのですか」とあります。哀歌はこれで終わっていま す。願いとも失望ともつかず、神への痛切な祈りにも拘わらず、私たちをもう見捨てたの でしょうか、という疑問、等々、心の揺れがそのまま伝わってきます。イスラエルの国が 亡び、その中でエレミヤが歌う歌は、このように、希望と絶望が入り混じったものです。 しかし、神はこのイスラエルを滅ぼされず、新しきイスラエルとしてここに立たしめて< ださっているのです。祈ります。

、．．

I